

少しずつでもより遠方へと観測を広げてゆく地道な努力を積み重ねるのが、もしかしたら最終的には最良の方法なのかも知れません。そういうわけで、現在計画が進行中の JNLT や VSOP などの天文観測に関する大型計画の早期実現が切に望まれます。

一方、理論屋による様々な試みもまた、尊重されるべきものです。常識に捕らわれない自由な物の見方こそ理論屋の特権ですし、たとえ観測屋たちから陰口をたたかれても、そこにわずかな可能性がある限り、例えば背景輻射の非等方性の問題の場合ですとダークマスターをモデルに取り入れることもしますし、電離ガスなどの存在を仮定したりもします。また、今回のように、重力レンズ効果を考慮する試みもその一例でしょう。たとえ得られた結果が否定的であってもなお、そこから得られた結論はそれなりの価値を持つと信じます。重力レンズ効果が背景輻射に対してどのように働くかを、一般的な場合について解明できたのは一つの成果でしたし、数値的に

その可能性についてはっきりさせたこともまた、意味があると思います。今回の研究から得られました成果の一つとして、重力レンズ効果はビーム幅が十分小さくできるならば、背景輻射の小角度の非等方性を増幅する方へ働くことが分かりました。今回は数値計算をしません、「銀河が重力レンズとして働けば、(数分のスケールでの効果は期待できませんが) 1分以下の角度スケールでの背景輻射の揺らぎを増幅して、その結果 VLBI を用いた観測で角度分解を高めれば、ひょっとしたら揺らぎが見つかるのでは？」という、望みを持ちつつ、私たちのお話を終わりたいと思います。

参考文献

- Partridge, R. B., 1983, *Rep. Prog. Phys.*, **51**, 647.
 Sakaki, M., 1989, *Mon. Not. R. astr. Soc.*, **240**, 415.
 Tomita, K. and Watanabe, K., 1989, *Prog. Theor. Phys.*, **82**, 553.

学会だより

「天文学用語集の改訂」について (2)

本会では用語集係において、昭和 49 (1974) 年に刊行された用語集の改訂作業を進めている (天文月報 1989年 11号 297ページ参照)。その後、1989年 8月 25日に第二回会議(注 1)、10月 16日には第三回会議(注 2)を開催した。また多くの会員のかたにご協力をいただいた(注 3)。

用語集係の作業手順は次のように進んでいる。

- 1) (学術論文に使用されている)用語を約 12,000 語採集して、1989年 3月第一次資料、8月第二次資料に印刷。
- 2) 重要な専門的概念に対応している用語約 6000 語を目安として選んで、1990年 3月第三次資料印刷 (予定)。
- 3) 第三次資料をもとに用語の和語を選んで、8月第四次資料印刷 (予定)。
- 4) 発音を記入して、1991年 3月第五次資料印刷 (予定)。

本事業は昭和 49 (1974) 年に刊行された用語集の改訂作業である。従って、手続きとしては、1974年の用語集に載っている用語をそのまま認め、改め、あるいは削除し、更に追加する用語を新規に選定することになる。1974年の用語集 (丸善出版、学術振興会発行) は、1989年 3月増刷され書店で販売されているので入手は容易である。できるだけ多くの会員の方々から、検討を要する用語の和語について、日本天文学会事務所用語集係にご意見をいただきたい。(石田恵一)

(注 1) 1989年 8月 25日に第二回会議を東大山上会館地下会議室で開いた。出席は、小暮智一、高窪啓弥、佐藤文隆、堀源一郎、小平桂一、松岡勝、石黒正人、平

井正則、沢武文、福江純、青戸邦夫、家正則、桜井隆、藤本真克、神田泰、石田恵一。配布資料は、(1) 第二次資料第一分冊アルファベット順と第二分冊分野別アルファベット順 (会議時に間に合わず後日郵送) (2) 学術用語制定の歴史(青戸)、(3) 他の学協会の用語集の例言(化学、地学、気象、機械工学)、(4) 「例言」の案について(世話人)、(5) 第三部の内容について(小暮)、(6) 星座名「はい」座について(沢木)。

(注 2) 1989年 10月 16日には第三回会議を、福岡県宗像市宗像ユリックス内会議室で開いた。出席は、坂下志郎、高窪啓弥、小平桂一、尾崎洋二、山崎篤磨、青戸邦夫、石黒正人、小暮智一、沢武文、福江純、平井正則、家正則、藤本真克、神田泰、石田恵一。配布資料は、(1) 第二次資料(回覧)、(2) 第二次資料の第二分冊分野別アルファベット順作業中ファイルのプリント(回覧)、(3) 「学術用語集」の改訂・増加の方針について(文部省)、(4) 電波関係追加約 200 用語(石黒)、(5) 銀河関係追加約 170 用語(高窪)、(6) 第三部の内容の案「主な研究機関・組織とその略称」(小暮)、(7) 「常用漢字表」にない漢字の使用について(青戸)、(8) 用語採否の判定(神田)。

(注 3) 1989年 8月から 12月に用語集改訂の作業に協力した主な方がたは、水野孝雄、海野和三郎、吉田春夫、堀源一郎、横山紘一、吉沢正則、福江純、小暮智一、坂下志郎、沢武文、松本敏雄、高窪啓弥、小平桂一、日江井栄二郎、清水幹夫、水谷仁、山下卓也、井上允、成相恭二、加藤万里子、蜂巢泉、渡部潤一、中村士、長沢工、新美幸夫、木下宙、石黒正人、松岡勝、佐藤文隆、山崎篤磨、尾崎洋二、齋尾英行、岡村定矩、椿都生夫、杉本大一郎 (以上敬称略順不同) ほか、及び世話人。